僕の友だち二三人

芥川龍之介

1

小穴隆一君（特に「君」の字をつけるのも可笑しい位である）は僕よりも年少である。が、小穴君の仕事は凡庸ではない。若し僕の名も残るとすれば、僕の作品の作者としてよりも小穴君の装幀した本の作者として残るであらう。これは小穴君に媚びるのではない。世間にへり下つて見せるのではなほ更ない。造形美術と文芸との相違を勘定に入れて言ふのである。（文芸などと云ふものは、――殊に小説などと云ふものは三百年ばかりたつた後は滅多に通用するものではない。）

しかし大地震か大火事かの為に小穴君の画も焼けてしまへば、今度は或は小穴君の名も僕との腐れ縁の為に残るであらう。

　小穴君は神経質に徹してゐる。時々勇敢なことをしたり、或は又言つたりするものの、決して豪放な性格の持ち主ではない。が、諧謔的精神は少からず持ち合せてゐる。僕は或時海から上り、「なんだかインキンたむしになりさうだ」と言つた。すると小穴君は机の上にあつたアルコオルの罎を渡しながら、「これを睾丸へ塗つて置くと好いや」と勧めた。僕は小穴君の言葉通りに丁寧に睾丸へアルコオルを塗つた。その時

の睾丸の熱くなつたことは火焙りにでもなるかと思ふ位だつた。僕は「これは大変だ」と言ひながら、畳の上を転げまはつた。小穴君はひとり腹を抱へ、「それは大変だ」などと同情（？）してゐた。僕はそれ以来どんなことがあつても、睾丸にアルコオルは塗らないことにしてゐる。……

小穴君は又発句を作つてゐる。これも亦決して余技ではない。のみならず小穴君の画と深い血脈を通はせてゐる。僕はやはり発句の上にも少からず小穴君の啓発を受けた。（何の啓発も受けないものは災ひなるかな。同時に又仕合せなるかな。）

足袋を干す畠の木にも枝のなり　　隆一

2

堀辰雄君も僕よりは年少である。が、堀君の作品も凡庸ではない。東京人、坊ちやん、詩人、本好き——それ等の点も僕と共通してゐる。しかし僕のやうに旧時代ではない。僕は「新感覚」に恵まれた諸家の作品を読んでゐる。けれども堀君はかう云ふ諸家に少しも遜色のある作家ではない。次の詩は決して僕の言葉の誇張でないことを明らかにするであらう。

硝子(ガラス)の破れてゐる窓
僕の蝕歯(むしば)よ
夜(よる)になるとお前のなかに
洋燈(ランプ)がともり
ぢつと聞いてゐると
皿やナイフの音がして来る。

堀君の小説も亦(また)この詩のやうな特色を具(そな)へたものである。年少の作家たちは明日(あす)にも続々と文壇に現れるであらう。が、堀君もかう云ふ作家たちの中にいつか誰も真似手(まねて)のない一人(ひとり)となつて出ることは確かである。由来我々日本人は「早熟にして早老」などと嘲(あざけ)られ易

い。が、熱帯の女人の十三にして懐妊することを考へれば、温帯の男子の三十にして頭の禿げるのは当り前である。のみならず「早熟にして晩老」などと云ふ、都合の好いことは滅多にはない。僕は無遠慮に堀君の早熟することを祈るものである。「悪の華」の成つたのは作者の二十五歳（？）の時だつた。年少高科に登るのは老大低科に居るのよりも好い。晩老する工夫などは後にし給へ。

この後は誰を書いても善い。又誰を書かないでも善い。すると書かずにゐるほど気楽であるから、「3」と書いただけでやめることにした。

（昭和二年五月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。